

2009年度 博物館学芸員実習  
体験レポート  
(神戸市立王子動物園)

甲南大学 文学部人間科学科 4年 岡本裕子

7月14日～7月27日までの二週間、私は博物館学芸員の実習生として王子動物園にお世話になりました。実習を共にする仲間は5人いて、総勢6名（全員女子）であらゆる体験、勉強をさせていただきました。博物館、動物園の実情を学べたことはもちろん、違う大学の学生と力を合わせて行う作業を通して協調性を学ぶことができ、自己を見つめなおすことのできた貴重な日々であったと実感します。

何よりも「命」に触れることができるという特徴の動物園での実習は、物事を考える力、視野を広げるきっかけとなりました。生きた動物を展示する博物館のあり方、そして学芸員の使命とは何か、実習を通じて考えたことをこのレポートにまとめたいと思います。

実習内容はたくさんのカリキュラムが用意されておりましたが、学習意義別に『飼育実習』、『サマースクール・動物絵画教室運営補助』、『動物ガイド』この3つに分類し、それぞれ体験を綴りたいと思います。

## 飼育実習

初日に園長や展示係長、動物資料館館長から園内の取り組みや現状を聞くオリエンテーションを終えると、2日目からはいよいよ楽しみにしていた飼育実習が始まりました。実習生6名を3班に分け、動物の飼育体験をさせていただきました。私は猛獣とゾウ担当の班になりました。草食動物担当の生徒と比べ、動物に触れ合える機会には恵まれず初めは残念な思いをしました。しかし掃除やえさやりはしっかりやらせていただき、生命を見守ることの大儀を学ぶことができました。動物の飼育に必要なことは大きく分けて3つ、「食事の世話」、「掃除」、「観察」だそうです。3つ目の「観察」という仕事が意外で私も他の実習生も思いつくことができなかつたのですが、展示係長いわく、これが最も大切なのだそうです。動物が口をきけない分、食事の様子、排泄の様子から動物の健康状態を察する必要があるとのことでした。動物に限らず我々人間も生まれたときから排泄や食事を親が観察し、健康状態を見守られて育っていると教えられ、なるほどと感心しました。

猛獣舎では掃除が主な仕事であまり動物を観察することは出来ませんでした。ヒョウやライオンの高い岩山にも登らせていただき、人間とライオンの身体能力の違いなどを実感することが出来ました。また食事の用意のお手伝いでは生の馬肉や鶏肉に触れ、スーパーでは見ることもない肉の姿やしたたる血に最初は緊張したものの、生き物の食事の違いがよく分かった経験になりました。また実習生の中に馬術部に入っているという生徒がいたのですが、その生徒から「怪我などで再起不能になった馬は動物園で肉になる」という話も聞かせてもらい、生命をもらって生きるということを良く考えるきっかけになりました。

もう一つのゾウの飼育はとても印象に残る体験となりました。骨軟化症の病気を抱える小象の「オウジ」との出会いです。

オウジは生まれつき骨が弱く、足の骨を全部骨折してしまったとのこと。以来公開は中止し、室内で寝たきりのオウジを世話していると教えていただきました。私達実習生

も世話を少し手伝わせていただきました。ミルクをあげたり、身体をふいたり。オウジを寝返りさせるためのクレーンの操作もさせていただきました。(小象といえども身体がとても大きいのでこれは本当に大掛かりな作業でした。) 獣医さんに教わって足のリハビリも手伝いました。自分で足を動かそうとしないので、オウジが嫌がっても足を前後に振り動かす作業です。

そんな一連の作業の合間に、担当の飼育員さんに「オウジ見て、どう？」とたずねられました。突然の質問に私は「かわいそう」と言ってしまいました。その言葉の中には、なんとか歩けるようになればいいのに、病気が治ればいいのにという願いを込めてのことだったのですが、飼育員さんは「…そうか」ととても残念そうでした。そして「象の骨折は人間の脳死みたいなものやからな…」とおっしゃったのです。その言葉を聞いて、私はとても軽薄なことを言ってしまったと後悔しました。もしかしたら飼育員さんは「こんな状態で生かされているオウジがかわいそう」という意味で言ったと解釈されたのかもしれませんが。そうではなくて、と私は必死に伝えたい言葉を探したのですが、上手い言葉が見つかりませんでした。実際にオウジにとっての幸せとは何なののでしょうか。そして動物園の役割とは何なののでしょうか。オリエンテーションではできるだけ動物の自然な状態を展示すること、と教わりました。自然な状態のことを考えると、動物園のオウジは不自然なのかもしれません。オウジが野生で生まれた小象だったらきっとすぐに死んでしまっているでしょう。実際に巨大なハンモックのようなベッドに寝かされたオウジはしっぽまでぐるぐるに固定され、痛々しい印象を受けました。しかしそれでも自由になる鼻で私の手をぎゅっとにぎった感触、差し出したミルクを懸命に飲む姿に心が温かくなったのも事実です。オウジの幸せとは何か、自然な命のあり方とは何か、実習を終えた今でも答えは未だに分かりません。しかしこのようなことを考えることに意味があるのかもしれませんが。動物園では動物のかわいらしさだけではなく、ぜひ命のあり方についても学んで欲しいと思いました。



←象舎の前の壁

オウジの様子は展示されず、象舎の前には数枚の写真が掲示されています。

## サマースクール・動物絵画教室運営補助

### サマースクール

サマースクールは小学校低学年・高学年の部に分かれて行います。小学校低学年の子にはキリンのえさやり・チンパンジーのえさ隠し・アシカのえさやり・調理場見学を体験してもらいました。実習生は子供たちの引率を引き受けます。動物園職員さんから、まずこれだけは、と注意されたのは「元気いっぱい引率すること」でした。大きな声で点呼や誘導を行い、子供たちが怪我をしないよう見守るのはもちろん、参加者の中であまり動物に興味を持っていない子にも、今回のスクールを機に動物に関心を持ってもらうことが私達の使命です。もともと動物好きの子供にも、新たな視点から動物を観察できるように上手に導くことも大切だと教わりました。

キリンのえさやりでは、舌の形はどうか、食べ方はどうか、手をなめられる感触、唾液のにおい…それらを学習してもらうことがねらいです。えさやりを楽しみながらも子供たちにそれとなく助言をし、気づきをうながします。

チンパンジーのえさ隠しでは、チンパンジーの運動場に入ってえさを隠します。やぐらのおかげ、石の間…なるべく見つかりにくい場所にえさを隠してからチンパンジーを運動場に開放します。チンパンジーがえさを見つけることができたならチンパンジーの勝ち、見つけられなかったら子供たちの勝ちというゲームです。普段入ることが出来ない運動場に入って興奮する子供たちが危険な行為をしないよう一段と目を光らせながら、子供たちと一緒に隠し場所を考えます。子供たちの個性は本当に様々だと実感しました。やぐらの天井にバナナをぺったり貼り付けるなど斬新な隠し方を披露する子もいれば、どこに隠したらいいか分からない、と泣き出してしまう子も。子供たちと同じ目線に立って、子供たちと一緒に考える、「教育」というものを初めて体験した気がしました。

アシカのえさやりではまず陸上から小魚を投げてもらい、その後水槽の前に行ってアシカがえさを食べる姿を観察します。アシカは意外とジャンプ力があるらしく、手を噛まれないよう気をつけながらのえさやりでしたが、躍動感あふれるアシカの姿に子供たちは満足していたようでした。

最後にサマースクールを締めくくるのは調理場見学です。動物の食べている肉や野菜を切る調理台の見学からはじまり、飼料倉庫などを見学し、最後は巨大冷蔵庫の中にも入って見学は終了なのですが、この巨大冷蔵庫の見学が意外と子供たちに大人気でした。夏真っ盛りの炎天下の中に、マイナスの温度の冷蔵庫に入るのはさぞ気持ち良かったのでしょうか。子供たちに喜んでもらうために余興で行ったことでしたが、その後、サマースクールの中で何が一番良かった？という問いに「冷蔵庫！」と発言した子供たちが多数…。午前中だけの短いスクールだったのですが、屋外で遊ぶ機会が減っている子供たちには少し疲れるプランだったのでしょうか。動物たちとの触れ合いが心に残る思い出となって欲しいと一生懸命頑張ったサマースクールの引率ですが、まだまだ反省する点が多そうです。

高学年の部では少人数制になっていて、実際に飼育員の仕事を体験してもらいました。私はゾウ班の子供たち担当で、体験内容は象舎の清掃とえさやりです。実習生も子供たちと一緒に作業を行います。巨大な象のウンチをシャベルでトラックに積み込む作業はとても体力を使う作業でした。なるべく子供たちのお手本になるよう率先して作業に取り組みます。体力的な辛さだけでなく、「ウンチ」の始末というものを子供たちは嫌がるのではないかという心配がありました。積極的に参加してくれてほっとしました。掃き掃除をして、デッキブラシでこすって…。少しでも作業が楽しくなるよう子供たちに話しかけたり、励ましたりしようと実習生も必死だったのですが、その点はあまり心配はいらなかったようでした。高学年のサマースクールは自発的に参加している子が多く、将来は飼育員になりたいと真剣な子も多数いたのです。動物は可愛いだけではなく、命を持った生き物であるということを理解しているということが読み取れて、とても嬉しい気持ちになりました。

象舎の清掃の後に飼育員さんの計らいで象に号令をかけたり、象の体に触れたりしている子供たちは本当に楽しそうでした。動物の体調を考慮する必要から、あまり頻繁には行えないでしょうが、動物を間近で観察し、触れるという体験はとても良い学習になると思います。最近ではテレビ番組で動物の特集がよく放送されるようですが、教育はメディアに頼るばかりでなく、直接自分の目で見て体験することも大切ではないかと思います。

飼育体験のあとは、草食動物のウンチを使って紙すきをしてもらいました。動物のウンチを繊維になるまで良く洗って、漂白して、型に流し入れて紙を作ります。型に流しいれるまでの工程は実習生が事前に準備をして置いたのですが、ウンチの感触を確かめてもらうため、子供たちにも手袋をつけてウンチを洗ってもらいました。ほとんどの子供が積極的にウンチを洗い、その後の紙すきも楽しんでくれたのですが、「嫌だ、汚い」という子も中にはいました。草食動物のウンチは汚くないこと、またウンチは健康のバロメーターで大切なことを事前の講義で子供たちに伝えてはいたのですが…。不潔に過敏になっている現代を過ごす子供にとっては、この紙すきは驚くべきものだったのでしょうか。教育の難しさと、現代の風潮を今一度考える機会になりました。



← (出来上がった紙)

左からゾウ・パンダ・キリンのウンチで作ったものです。もう一つコアラのウンチもあったのですが、ウンチが少量のためとユーカリの良いにおいで人気が高く、すぐに無くなってしまいました。

## 動物絵画教室

二日に渡って行われる絵画教室です。参加対象者は小学生。5～6人の班に分かれて、動物の絵を描いたり、粘土づくりをしたりします。実習生はお世話役として、各班に一人ずつ配属されました。あちこちの小学校からの参加なので、班は知らない子同士で構成されます。緊張せずにみんな仲良く、楽しく過ごしてもらうために実習生は必死です。



←今回の絵画教室のテーマはゴリラとサル。リスザルを粘土で作ってもらっているところです。絵画教室の目的は「じっくり動物を観察すること」。ただの図工になってしまわないよう、動物の細部までの観察を促します。口の先、爪の形…。子供たちが新たな発見を自発的に出来るようにほんのちょっとしたアドバイス。これが難しいのです。

絵画の先生に描いた絵をみてもらいながら、工夫した点を自分で発表してもらいます。→「チンパンジーの腕がこうなっていたので、そこを頑張って描きました。」子供たちの発言からは絵を頑張って描いたこと、その中で動物の発見ができたことが読み取れます。

楽しく絵を描きつつ、動物を観察してもらう絵画教室の試みは大成功のようでした。



←自分たちで発見したことをクイズにする、という企画もやりました。私のグループはシロテテナガザルに関するクイズを考えます。クイズ作りはみんな楽しそうでした。クイズの出題をする姿からは誇らしげな様子もうかがえます。自分で観察して発見した事柄はきっとその子の財産になるのでしょう。

絵画教室のテーマが「ゴリラとサル」になったのは、今年が「国際ゴリラ年」だったからでした。教室の最後に、ゴリラが絶滅の危機にあるということを「ブロック崩しゲーム」を通して体感してもらいました。

- ① 植物、昆虫、小動物の絵を描いたブロックをピラミッド型に設置。上のほうにはゴリラがいます。



- ② 「このピラミッドはゴリラの森です。人間が木を伐採するとどうなるでしょう？」

ピラミッドから木が描かれたブロックを抜いてもらいます。



- ③ 「木や植物が無くなると、それを住処やえさにしていた昆虫も死んでしまいます。」

昆虫のブロックも抜いてもらいます。



- ④ 「昆虫がいなくなると、それをえさにしていた小動物が死んでしまいます。」

小動物のブロックも抜いてもらいます。もうピラミッドは隙間だらけでぐらぐらです。



- ⑤ とうとうピラミッドは崩れてしまいました。「ゴリラの森が崩壊してしまいました。」

残念そうな子供たちの声が響きます。実際のゴリラの森の様子と重ね合わせてイメージができたでしょうか…。



## 動物ガイド

動物ガイドは動物科学資料館の職員さんが定期的に行うものですが、一日だけ実習生が代わりをつとめました。ガイドのテーマは絵画教室の時と同じく「ゴリラ」です。ガイドの内容はゴリラの生態をはじめとし、国際ゴリラ年の説明をし、ゴリラ絶滅の危機を訴え、ゴリラ保護に関する理解をもってもらおうというものです。今までの実習内容は職員の方が用意してくださったプログラムの補助でしたが、このガイドだけは実習生6人だけで工夫をこらして仕上げました。子供にも分かりやすく説明するためクイズ形式にしたり、大型のぬいぐるみを持ち出したり。学芸員の大事な仕事のひとつであるこのような「教育普及活動」を実際に任せてもらえたので、とても力が入りました。職員や学芸員の方からの厳しいご指導を経て何とか乗り越えたガイドでしたが、とりあえず来園者の方には喜んでもらえたようでほっとしました。心に残るゴリラの話となっていれば良いのですが、そのあたりはまだまだ精進が必要そうです。

## まとめ

今回の実習で思ったことは動物園では動物の観察を通して様々なことが学習できるということです。観察を通して発見ができ、動物についての知識のみならず、自分が生きる環境や命の重さについて考えるきっかけとなります。また学習は与えるだけではなく、自発的に行うことも大切だと知りました。学校での授業が受動的なものであるならば、博物館、動物園は能動的に学べる施設であり、またそのようにあるべく学芸員は努力すべきだと感じました。楽しさをアピールしながらもきちんと学習できる素材が用意されている。動物園とはそんなところであると思います。



←「楽しく学習を！」と一致団結した実習生たちの動物ガイド。私はトラの着ぐるみを着て頑張りました。ちびっ子には大うけ。憩いの場を作り出すことも博物館には大切なことと思います。